

インドネシアで文化交流のハブとなる日本人 cafe MONDOのオーナー泉本俊介さん

2014.12.03

👍 84

🐦 ツイート

0

👍 いいね！

👍 G+1

インドネシアの首都・ジャカルタの道はたくさんのバイクと車が行き交い、熱帯性気候の熱氣に加えて、人々のパワーも伝わってくるような勢いがあります。

そんなジャカルタでちょっと変わったカフェを経営する日本人の方がいると聞きしました。若者向けの新しいファッション・ブティックが立ちならぶマン地区にあるそのカフェの名前はcafe MONDO（カフェ・モンド）。ただのカフェではなく、ジャカルタの音楽文化交流のプラットフォーム的役割を果たすスポットとして有名なのだそうです。

今回のカフェのオーナーの1人である泉本俊介さんに詳しくお話を伺ってみました。

cafe MONDOをオープンするまで

奈良出身の泉本さんは東京の美術大学で映像の勉強をし、その後デザイナーとして活躍していたという経歴の持ち主。その後、ジャカルタで仕事をしていた先輩に声をかけられたことがきっかけで、インドネシアで新しいことをやってみようと思われ移住されたのだそうです。

2005年にインドネシアに来てからも、主にデザイナーとして仕事をするかたわら、音楽が大好きでインドネシアのカルチャーを探し求めた泉本さん。

彼が行きついたのは『バンドン』というインドネシアの街でした。当時この地のバンドン工科大学の学生たちが中心になって、新しい音楽やファッションなどのカルチャーが盛り上がりを見せている場所でした。

泉本さん：

「バンドンの音楽ライブによく行っていたんですが、その時たまたまあるアーティストのTシャツを来ていたら、地元のインドネシアの人たちにいきなり声をかけられたんです。当時はまだインドネシア語も話せなくて片言でのコミュニケーションでしたが、音楽好きという気持ちは通じていたのだと思います。そうやって出会ったインドネシアの音楽ファンの仲間に『ジャカルタにもこういったカルチャーが見つけれられる場所はないかな？』って聞いて、カルチャー探しを続けました」

そして、泉本さんはジャカルタの「スラバヤ通り」というアンティーク街にインドネシア音楽のレコード屋さんがあることを知り、そこで発見したインドネシア音楽がとても興味深いと感じ、以降何度も通うことになりました。そこは音楽好きの仲間達が集まって交流するサロンのような場になっていたのです。

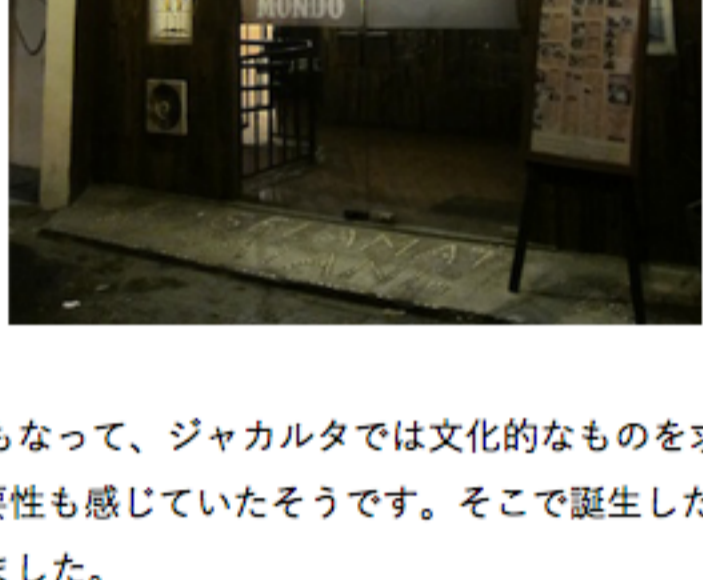
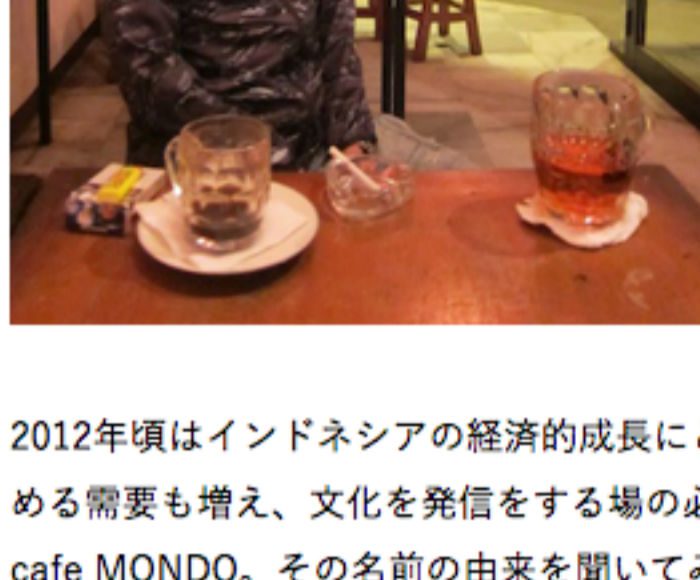
泉本さん：

「日本の音楽もそうなんですが、音楽というのは進化すればするほど細分化していくものなんです。でも、インドネシアの音楽はまだまだ細分化されてなくてごちゃ混ぜの caos 状態だったことに衝撃を受けました。また、日本の音楽とは違う進化の仕方もあるのもとても興味深いのです」

当時、昼間はスーツを着てデザイナーとして仕事をする一方で、夜と週末はインドネシアの音楽を始めとしたカルチャーへの興味と、地元の音楽ファンとの交流を深めて行く日々が過ぎました。

2012年に思い立ってcafe MONDOオープン

そんな泉本さんが、仕事を辞めてカフェをオープンすることになるのはとても自然なことだったのかもしれない。



2012年頃はインドネシアの経済的成長ともなって、ジャカルタでは文化的なものを求める需要も増え、文化を発信をする場の必要性も感じていたそうです。そこで誕生したcafe MONDO。その名前の由来を聞いてみました。

泉本さん：

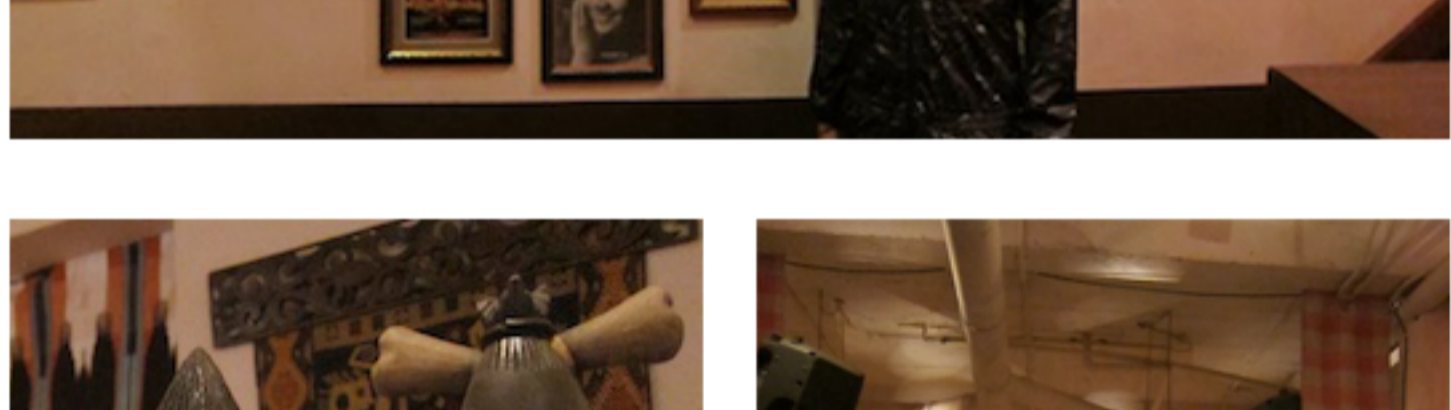
「『Mondo（モンド）』とは、本来はイタリア語で『世界』という意味なんですが、映画や音楽好きの間では『奇妙な、不思議な』という意味があります。その二つの意味を踏まえてこのカフェでは、新しい音楽だけでなく、古いインドネシアの音楽のイベントをやったり、まだ知られていない国内外のカルチャーを発信したりすることで、時代や国籍を超え文化がミックスする場に出るのではないかと考えています」

このカフェの作り自体もちょっと変わっていて、1階が受付、地下と2階が飲食ができる広い空間になっています。地下には、いくつものスピーカーが設置されており、インドネシアの屋台を改造したDJブースもあります。

普段はゆったりとしたソファでくつろぎながら食事を楽しめるカフェ空間で、イベントがあるときは音楽や映像が楽しめる空間になります。

メニューを見てみるとインドネシアの定番料理「ナシゴレン」（インドネシア風チャーハン）やミーゴレン（インドネシア風焼きそば）が食べられるだけでなく、カレーライスにカレーうどん、オムライスなどの日本食メニューもあり、日本とインドネシアが両方そろっています。私がおじゃましたときは、ピリ辛ナシゴレンとマンゴージュースを頂きましたがどちらも日本では味わえない本場の味でおいしかったです。

店内のインテリアも、日本では見たことがない独特な雰囲気を出しています。



カフェのオープン準備時、泉本さんはインドネシア中をトラックで周り、各地のあらゆるアンティーク雑貨を自らかき集めたのだそうです。

インドネシアは世界最多の島々からなる国だけあって、それだけ多くの民族と言葉と文化があります。そのインドネシア中から集められた雑貨や、このカフェを訪れたアーティスト達の作品、また、DJたちが残していったステッカーなどによってcafe MONDOの店内で独特の雰囲気が生み出されているのを感じられます。

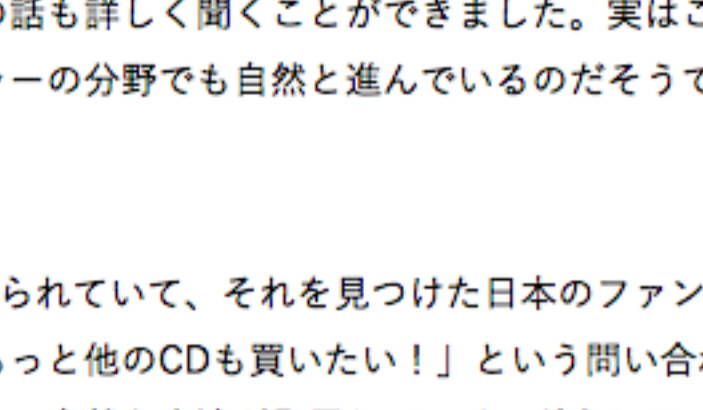
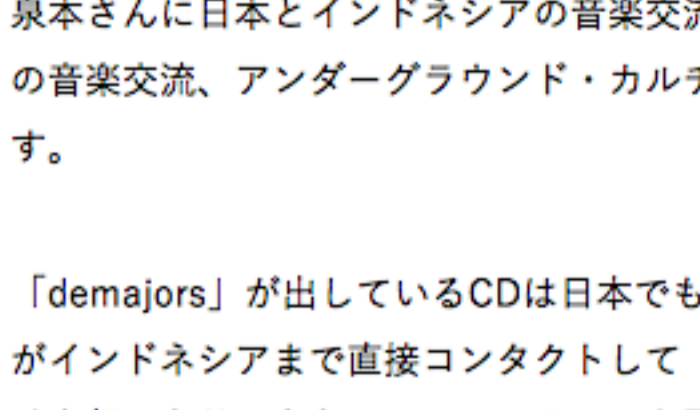
このカフェは、ジャカルタに住む日本人の憩いの場でもあり、音楽イベントがあるときにはさまざまなジャンルの音楽ファン、そして日本人のアーティストが集まります。そして、他の国からも「インドネシアに面白い場所がある」と聞きつけ人が集まってくるそうです。

音楽を通じた日本とインドネシアの文化交流

泉本さんのお誘いでジャカルタの色々な音楽イベントに招待してもらいました。そして、彼がいかに音楽で多くの人とつながっているかということを目の当たりにしたのでした。

中でも彼自身が参加している地元の音楽レーベル会社「demajors」で放送しているラジオ番組のスタジオに到着すると、全員が「シュン！（泉本さんの愛称）よく来たね〜！」と大歓迎。

地元の音楽ファンたちが集まってまるで学生時代にもどったような楽しい雰囲気。ここでは日本人だとかインドネシア人という隔てはなく、音楽が好きな人間同士という深い交流があるのです。



泉本さんに日本とインドネシアの音楽交流の話も詳しく聞くことができました。実はこの音楽交流、アンダーグラウンド・カルチャーの分野でも自然と進んでいるのだそうです。

「demajors」が出しているCDは日本でも売られていて、それを見つけた日本のファンがインドネシアまで直接コンタクトして「もっと他のCDも買いたい！」という問い合わせを行ったり、さらには、アーティスト同士の自然な交流が発展して、インドネシアのミュージシャン「Payung Teduh」が下北沢でライブを行ったりしたほど。

このバンドはインドネシアのポップ・アコースティック系バンドで、日本でも人気が出そうだと注目されています。アコースティックギターに乗せたやわらかいヴォーカルが親しみやすく、世代と文化を超えて、ゆったりとした時間を過ごしたいときに聞くのにぴったりな音楽です。

こうした音楽交流の場でハブとなるのが泉本さん。日本人とインドネシア人のアーティストをつないだり、ボランティアとしてインドネシアで開催される音楽イベントに参加したり、ラジオ放送に参加したりと、特に地元の音楽関係者の間では広く知られています。

インタビューを泉本さんに申し込んだ時は「僕なんて、ただの喫茶店の店長ですから……」と謙遜されていたのですが、音楽を語り始めると沸騰するように熱くなりこちらが圧倒される程でした。

泉本さんの言葉で印象的だったのは、「本当の文化交流というのは『教える』ものではなく『一緒に楽しむ』ということだと思う」というものです。この信念があるからこそ、cafe MONDOがただのカフェではなく人を引きつける文化交流の場になっているのだなと思いました。

泉本さんのお話を伺って、なによりも泉本さん自身が「文化交流のハブ」になっていることを確信したのでした。

関連情報

cafe MONDO
Jl.Kemang Raya no.72
tel 021 719 5701

Payung Teduh

[website](#)

中村綾花：フランス・パリを拠点に活動するフリーライター。著書は、世界で婚活の旅をしながら恋愛・結婚事情をレポートした「世界婚活」（朝日出版）。有料コンテンツ・サイト「cakes」にてパリの本当の日常をレポートする「すっぽんぼんパリ」連載中。<https://cakes.mu/series/3055>

👍 84

🐦 ツイート

0

👍 いいね！

👍 G+1